

松江藩の儒学者 黒澤石斎が到着した境地

——「曲直」の間を行く——

幕府の儒官である林羅山のもとで学び、幕府作成の系譜「寛永諸家系図伝」(清和源氏の項)編纂に携わった黒澤石斎(弘忠 1612~78)は、松平松江藩初代藩主の直政が羅山に儒者を求めたことで、松江藩の儒者となりました。2代・3代藩主の学問の師となり、日本初の女性史「本朝列女伝」や出雲国の地誌「懐橘談」、藩主の年譜、藩士の勤功録「列士録」編纂など、初期藩政において重要な役割を果たします。隠居後、しばしば住んだ菅田(現:松江市)の山荘巻石山に掲げた「曲直」の額(展示物)は、物事をうまく処置するための融通性を説く、石斎が到達した境地でした。

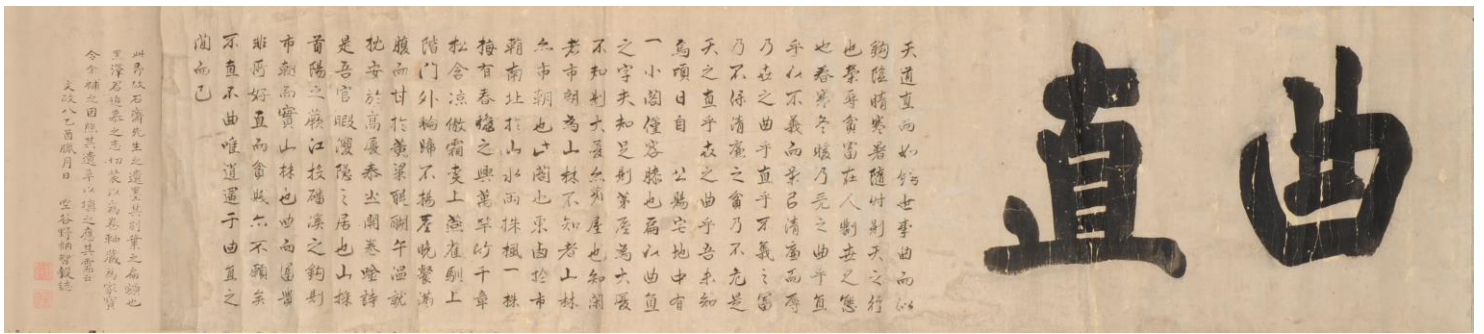
自画自賛の自画像

背後から追い風を受け、正面を見すえ、馬上に跨る自画像です。馬の研究家でもある石斎が描く馬は、精巧緻密です。この肖像は、石斎自ら自身の肖像を描き、また家主の事蹟を称える賛文(上部の文章)をも記した、「自画自賛」の珍しい肖像画です。甲冑姿なのは、臨戦態勢にあることを示しています。注目すべきは、兜の前部にある前立が「巻き物」であることで、石斎にとって文字を記した書物こそ、自らが信じるものでした。そこには、学問にかける意気込みが感じ取れます。上部の賛文では、「義を貫くことが大事である」と述べています。

黒澤石斎肖像画 一幅 寛文元年(1661)8月1日

松江歴史館寄託





せきさい
石齋が到達した境地——曲直——

せきさい すがた けんせきざん
石齋は64歳（1676年）の夏から嶋根郡菅田（現：松江市）に山荘「巻石山」を営み、公務の合間に通いました。翌年、子の長頭へ家督を譲ってからは、亡くなるまでの1年半、この山荘に暮らします。山荘には、せきさいが到達した境地を示す「曲直」の額が掲げられました。その意味するところは、天の道にも人の道にも、きよくちよく、すなわち曲がった不正な状況と、真っ直ぐな正しい状況が存在しています。しかしせきさいは、不正（曲）で裕福になることも、正しい（直）からと貧しく賤しくなるのも良しとしません。「直せず曲せず、ただ曲直の間に行くのみ」と喝破するように、きよくちよくの長短を認め、物事をうまく処置するための融通性を説きます。原理原則にとらわれないじゅうなんせいこそ、せきさいの到達した境地でした。

曲直 黒澤石齋筆 一卷 延宝3年4月～同5年7月（1675～76） 松江歴史館寄託

[意訳] 曲直

天道は真っ直ぐで糸のようである。世の中の事は曲がっていて釣り針に似ている。晴れたり曇ったり、寒かったり暑かったり、それは天の行いである。人には栄誉や恥辱、貧富があり、世の実態でもある。春寒く冬暖かいのは天の曲であろうか直であろうか。不義で栄え、清廉で辱めを受けるのは、世の曲であろうか直であろうか。不義による富は保つことができず、清廉による貧しさは危うくない。これは天の直であろうか世の曲であろうか、私はまだ知らない。近頃、藩から宅地を賜り、中に小さい屋敷がある。屋敷には、「曲直」の文字を書いた額を掲げる。その理由は、満足することを知っていれば、茅葺きの家も大家となる。知らなければ大家も茅葺きの家となる。静けさを知る者は、街中でも山林にいるように思え、知らない者は山林でも街中にいるよう思える。この建物は、東西が街中で南北に山水がある。二本の楓の木と一本の梅の木があり、春と秋に趣がある。多くの竹と松があり涼しい。枝に燕や雀が上り、馴れて階にも上る。門外の車輪や馬の蹄は塵を挙げず騒々しくない。晚餐で腹を満たし、大菜の深い味わいを楽しむ。午後の暖かいうちに眠る。安らかに高く大きい家にゆったりと座り、巻子を開いて詩を詠む。これが公務の暇に浸るわたしの隠居である。山で蕨を採り、湖で釣りをする。まちなかも山林のようである。曲して富貴となるのは、私は好まない。直して貧しく賤しくなるのも、また願わない。直せず曲せず、ただ曲直の間に行くのみである。

（朝日寺住持空谷〔智叡。1766～1834〕の奥書）

「これは故黒澤石齋先生の遺墨である。その別業（菅田にあった別荘・巻石山）に掲げられた扁額である。追慕の志で扁額を切り取り軸装とし、黒澤家の家宝として所蔵する。私はこれを補い、石齋の遺した草稿に照らしてこの文字を記し、求めに応えた。文政8年（1825）12月 空谷誌す」